



No. 28

1989年10月発行

新潟県支部報

私のフィールド

阿賀野川河口

千葉 晃

満々と水を湛えた川面を薫風が吹き渡っていく。ここは阿賀野川の河口。はるか尾瀬の山並を下り、猪苗代湖から流れ出た長流がまさに日本海へ注ぎこもうとする所だ。川や海のみえる広々とした景色はなぜか心をなごませてくれる。泰平橋付近から下手、河口に至る川岸は私の大好きな、そして足繁く通う探鳥地のひとつである。鳥に恵まれなかった日もさして不満には思わない。不思議な所だ。柳の葉の芽吹く頃が最良である。土手の斜面には若草が萌え、川面は穏やかに広がっている。遠く目をやると、残雪深い飯豊の白い峰々と新緑の五頭の山並みが連なり、その裾は霞んで蒲原の耕地へと続いている。この景色の中に独り包まれている時、言葉に尽せないある種の充足感を覚える。

阿賀野川河口には、あまり人手の加わっていない砂州が残されている。冬の間、ここを訪れる人はほとんどいない。冷たい北風が枯れたヨシやマツヨイグサを連日のようにゆさぶり、砂粒を巻き上げながら吹き抜けていく。そんな冬枯れの砂州を訪れ、雪の残るヨモギの原をせわしなく鳴きかわしながら採餌を続けるベニヒワの大群に出会ったこともある。北国への旅に出遅れたカモメ達がひねもす汀で過ごす頃、ヨシ原には、やはり北へ向うオオジュリンの姿がある。日が暮れて飛行場の

滑走路に青や赤のランプが点ると、夜空は一転してオオジシギの舞台へと変わる。奇妙な声の後に空気を切り裂く激しい尾羽の音が続く。一瞬、ここは新潟かと疑ってしまう。広い草原はヒバリの声で満ちあふれ、オオジシギの外、チュウヒ、オオセッカ、ベニマシコ、オオジュリンに出会うこともある。そんな時、ふと自分が北海道の片隅にいるのではないかと錯覚してしまう。北国への憧れがそう思わせるのかもしれない。

夏空の砂州をコアジサシが軽快に飛び交う。ここは、本種の集団繁殖地のひとつとして大切な所だ。これまで150番以上も繁殖した年がある。コアジサシ、コチドリ、シロチドリ、そしてヒバリはこの草原で卵を抱き、雛を育てている。この砂州がいつまでも手つかずに残ってほしいと願わずにはいられない。コアジサシが南へ帰りはじめる頃、付近のヨシ原はツバメやムクドリの大群に変わってしまう。一万余のツバメが乱舞する様は圧巻である。この季節にはシギたちも長旅の途中に立ち寄り、しはし翼を休めていく。ホウロクシギの姿に胸を躍らせ、ツバメチドリとの出会に興奮した思い出もある。何かにとりつかれてしまったようにここに来てしまう。そんな自分に気付いてつい苦笑する私である。

外部寄生虫一例と鳥の病気一例

日本歯科大学 千葉 晃

本誌第26, 27号では、鳥の卵殻の構造と機能についてよもやま話をした。今回は文字通り、研究室の片隅に眠っている資料の中から2点を選んで御紹介したい。私はどちらかと言うと好奇心の強い方なので、鳥に関してもあれやこれやと首をつっこみ、その結果、雑多な資料がいつの間にか集まり、取りまとめをする機会もなく部屋の片隅に積み、眠らせてしまうことが多い。これらの資料の多くは自分自身の収集したものだが、中には人様からいただいたものも含まれている。早くまとめなければと思いながら、時の流れに押し流され、つい不義理を重ねてしまう。しばしば自己嫌悪に陥りながらも、この欠点はなかなか直りそうにない。

その1. 鳥の血を吸う寄生バエ

鳥は家禽、飼鳥、野鳥を問わず、多くの寄生虫や病原体を宿していることがある。これらの中には宿主に害を与えるもの、ほとんど害を与えなくとも周囲の生物、とりわけヒトの病因になるものなどもあり、医動物学、衛生学、病理学、寄生虫学などの重要な研究課題になっている。私たちは普段、双眼鏡や望遠鏡を用いて野鳥の生活を観察しているので、鳥の体表や体内に宿る寄生生物に関心を払うことはほとんどない。しかし、標識調査に従事したり、繁殖生態を調べる過程では、必然的に鳥体に触れることが多いため、好むと好まざるとにかかわらずダニ、シラミ、ケジラミなどの外部寄生者(ectoparasites)とつき合うことになる。ムクドリの子ナなどは、しばしば米粒大のダニを宿しており、特に珍らしくもない。また、衰弱した野鳥を保護した

際にシラミが多数這い出して来て、思わずふるえあがった思い出を持つ人も多いであろう。私はこのような経験の外に、吸血バエに出会ったことがある。そのハエは、今も大切にガラスの細ビンに保存され、専門家による同定を待っている。1970年の秋、私は授業を終え



図1 アオジから得た寄生バエの一種

ると大急ぎで教室を後にし、バスで小針海岸へと向かった。折しも小松吉蔵さんが真砂町海岸で標識作業を行っており、アオジ、カンラダカ、オオジュリンなどが標識・放鳥されていた。私はお手伝いをしながら、鳥を網からはずし、袋の中に入れていった。ある網でアオジをはずしていると、羽毛の間を見られない虫が動いているのに気付いた。この虫はハエであり、翅を持っているが飛ぶ様子はない。普通のイエバエなどと違い、体はかなり扁平で、アオジの体羽の中をすばやく走りまわる。やっとこのハエをつかまえた。御覧のように(図1)腹部は暗色だが全体に色調は淡く、固定標本では眼も肢も淡黄色を帯び、爪は黒く強大である。翅は透明で、他のハエと大差はない。いずれ専門家にみてもらうがシラミバエ科ウマシラミバエ(*Hippobosca equina*)とにらんでいる。動物分類名辞典

によれば、「ウマ、ウシ、イヌ、鳥類などの体表につき吸血する。活発に飛びまわる」とある。私の夏休みの宿題はまだ残りそうもない。

その2. 鳥の肺に巣食うカビ

私たちの棲む環境にはカビ(子囊菌)の胞子が多数漂よっている。このカビの中にはヒトや鳥の病原となるやっかいなものがある。家禽を扱う専門家や動物園の技師の方々にはよく知られている「アスペルギルス症」である。アスペルギルス症は、コウジカビ属(アスペルギルス, *Aspergillus*)の胞子が生体内に侵入・増殖し、宿主生物に誘起した病変(状)を指す。この病気は家禽や家畜の消化器や呼吸器に発症し、時にはヒトにもみられる。本間隆平氏は以前鳥類に何例かアスペルギルス症を認め、飼育下のヒクイドリ、エミュー、オシドリ、クジャクおよび野生のコハクチョウで本症を報告している(本間, 1966年)。また、初鹿野高好氏も県下のハクチョウ類の死因のひとつとして本症(仮性結核)をあげている(初鹿野, 1965)。このように、アスペルギルス症は、家禽や野鳥の死因となる重度の病変である。

1974年の冬、風間辰夫氏からいただいたオオハムは一見して本症と判断できるものであった。この鳥は、同年1月7日新潟市五十嵐海岸に漂着、拾得されたもので、体重1.8 kgの雌個体(翼長318 mm, 尾長56 mm, 嘴峰長59 mm, 跗蹠長85 mm)であった。同氏によって解剖された体幹部を私がもらい受け、さらに病巣部を詳しく調べてみた。アスペルギルスの菌糸は白く、肉眼でも明瞭に認められ、気管と肺の一部および気嚢に侵入していた(図2)。特に気嚢部では菌糸の侵入・増殖が著しく、9 cm × 5 cm程度の部位が白色の厚いマット状に変質していた。この菌糸のマットには緑色の斑状部が数箇所見られ、そこは子嚢胞子が落下し、濃密に集積している箇所であった。

この病巣部は、本間隆平氏がハクチョウで報告したものより数倍も大きく、病状の深刻さを物語っている。後日、この病巣を筑波大学に送り調べていただいた所、病原は *Aspergillus fumigatus* であるとの回答を得た。本菌は、動物やヒトの器官を侵して病原となるよく知られた普通種であり、同属近似種の *Asp. flavus* や *Asp. niger* (クロカビ)の胞子は肺内に侵入してアレルギーを引き起こすことも知られている。アスペルギルスは短期間に夥しい数の家禽を死亡させることがあり、1960年イギリスでは、わずか数カ月の間に七面鳥とアヒルのヒナ合計10万羽以上が死亡したことが知られている。大規模な発症は家禽ばかりではなく、野生鳥類にもみられ、北米ではオシドリ(Beltrose 外, 1945), マガモ(Herman, 1943, Feff, 1955; Adrian, 1978), カナダガン(Mcdougale と Vaught, 1968)で報告例がある。要するに、飼育下の閉鎖的環境や逆に開放的な環境下でも鳥の生息密度が高い場合は、顕著な症例が導びかれ易いと思われる。私は、以前新潟海岸における海鳥の斃死体漂着現象を調査したことがあったが、死因のひとつとして明確な根拠を持



図2 アスペルギルス症を示すオオハムの内臓(白い部分が菌糸の集塊)

ためまま病気をあげたことがあった。オオハムにみられた本症の発見は、海鳥の病死例としてここに書き留めておきたい。

稿を終えるに当たり、日頃討論いただいている本間隆平氏、ならびにオオハムの死体を供与して下さった風間辰夫氏に心底より厚く御礼申し上げます。なお、紙幅の都合により、引用文献の掲載は割愛した。

三宅島探鳥印象記

渡辺 範雄

'85那須全国大会で同行した家内と知り合った鹿児島人の若い人から、帰りに三宅島に立寄ったと写真を貰ったことがある。いたいたしい噴火跡の新潟地周辺の風景だった。いつか三宅島にと願っていたのが現実となった。第35回全国大会が同島で開催されるとあって迷わず参加を申込んだ。私は次の日程を選んだ。

- 6 / 2 日の出棧橋から東海汽船すといちや丸乗船, 出航夜10時10分
- 6 / 3 4時25分三宅島三池港到着, 9時から村営バスで島内探鳥, 午後1時半から総会…10時40分懇親会終了
- 6 / 4 6時バス4台に分乗島内探鳥, 昼食後船, 航空機で帰る人を見送り, 午後10時半最後の島内めぐり雄山頂上に登る。5時20分坪田地区民宿に18名宿泊
- 6 / 5 4時半大路池へ早朝探鳥 7時半迎いのバスで宿へ, 8時50分空港, 10時10分離陸, 羽田空港着解散

三宅島は東京から離れること約180km, 島の全面を覆う玄武岩質及安山岩質火山砕屑岩, 海岸に押し出している玄武岩溶岩, 切通しの崖に表われている古い火山礫の層と土の層との重なり火の島である。海岸線の長さ約35km, 径約8kmの丸い島, 中央に814mの雄山があり, 約20°~30°の勾配で裾野が延び海に至る。このように資料に記されている。

6月2日船室ではエンジンの騒音と冷房のききすぎでうとうとしている中夜が明け, 4時頃本部の小河原さんに起された。20分後には長い列の村営バスの中程の指定車に乗らん

でいた。切取りの上の草むらで鳥の囀りを聞くが分らない。シマセンニュウだという声で窓越しに外をみると偶然鳥の姿が目に入った。島で最初におめにかかった鳥である。神着地区の観光ホテルに着いた。同行の人達は仮眠どころでないといふ3人だけ残して外出する。

私は1時間ほど横になった後ホテルを出て島の一周道路を左回りに歩き出した。ヒヨドリ, スズメ, ホトトギスを確めてゆく中道端のサンゴジュの生垣に頭から胸に橙赤褐色の鳥が目に見え飛込む。コマドリがこんなに近くで見つかるのかと驚いた。山側の林の中からしきりにコマドリの囀りが聞えた。海側からコジュケイ・ハシボソカラス・キジバト更に電線にホオジロ・スズメが止る。コゲラもみつかる。前から来た年輩の島の人に声をかけ, 周辺の木の名を聞き暫らく立話しをした。別れ際にこんな島で過疎でもいゝから, 軍用飛行場は造ってもらひたくないと残して去った。

歩き出して20分後8m先の道路脇にアカコッコをみつけた。ツツジの生垣の畑の中に入ったので近づくと反対側の山の方へ飛去った。図鑑・写真でみた通りの姿だった。頭上をホトトギスが鳴きながら近くのハンノキの枝に止った。驚くほど沢山の鳥がおり, しかも人



新瀅池跡 (1989.6月撮影)

の鳥の生態調査をやっているという返答であった。12時大会々場に着く。ここで毎年一緒する長野の中沢さんを見つけた。前日飛行機で来たこと、朝大路池でヤマショウビンを見たが、この三宅では初記録と本部の塚本さんに珍しいことだと云われたそうである。

島を去る朝4時半宿を出て大路池まで歩くことになった。2km少々道の程である。山口の鳥仲間はどうしてもアカコッコの写真を撮りたいということで二人で先行した。畑の付近民家の庭を探し乍らゆく。見つかるが飛立ってしまう。大路池入口の標識のある場所に着く。タブの樹林の暗い中からコマドリの美しい声が聞える。他の人達を待ち林間の道をイジマムシクイの豊かな囀りを聞きながら急坂を下って池のほとりに着く。探したがヤマショウビンには出会えなかった。樹上近くにヤマガラを見つける。黒ずんでみえるオーストンヤマガラであった。本土のものよりやゝ大柄に見える。外輪山の上空をとぶトビ、カラス更にサシバも見た。遠くでみかけた池のほとりのカモは近づいてハシビロガモと分った。この辺りは58年の噴火以前は鬱蒼としたシイの大木群で昏いほどの繁みだったと小河原さんは話してくれた。火山灰をかぶって枯木となった木も多い。6年を経てこれだけ緑を回復した逞ましい樹木の生命力にしきりに皆んなは感心していた。この池は周囲2kmの火口湖である。カラスバトもみた。鳥合せでは2日間で40種を数えた。この旅に加わることが出来たことを本心から喜んだ。池を1周し打合わせた時刻に宿のマイクロバスが来ていた。三宅空港を10時10分に飛立てば40分後には羽田である。往路眠れなかった7時間の船旅に比べて早いのに驚く。暫らくの間アカコッコの姿とイジマムシクイの囀りが忘れられない。

自然保護、野鳥保護の面からどうか。問題の1つにネズミ駆除が目的で導入したイタチの事がある。サトイモ、サツマイモの実収高

は増えたけれどもコジュケイ・アカコッコは激減していると島の人もいう。役場の幹部も当惑した回答を総会で述べていた。万事旨くゆかぬ自然界の現実がある。又三宅ではカムリウミスズメ営巣場保護の教訓があった。伊豆岬から見える三本岳で米軍の射爆訓練が行なわれたが、海鳥保護の立場から訓練は中止となった。そして1984年から続いている夜間離着陸訓練空港建設反対の動きは、島内の部落道路沿いに数多くの建設反対の掲示類が島を訪れる人々に強く訴えている。島の現状を語ってくれる。民泊した食堂の壁にも土井たか子委員長の色紙が額に入れて飾られていた。島内めぐりの村営バスの各運転士も島の将来を気づかっていた。会えばお早うと声をかけてくれる島民の結束は非常に固いものを感じた。長野の鳥仲間は、全国大会では一番印象に残る三宅島でしたと手紙をくれた。私も同感である。豊かに鳥が住みつく三宅島である。そんな三宅島を軍用飛行場として適地であると見解をのべる為政者の胸中が不思議でならない。

＜原稿募集＞ 次号 (No.29) は広く支部会員からの投稿で「鳥 — あの感動したとき」というテーマで特集を組む予定です。会員の方ならどなたでも鳥の姿や動作を見てまたは発見をして感動した経験はお持ちでしょう。是非その時の情景や気持ちを綴ってご投稿下さい。特に初心者の方の投稿を歓迎します。

一応 800 字 (原稿用紙 2 枚) 以内としますが、多少長くなっても、また写真を沿えても結構です。12 月末頃まで下記へお送り下さい。

〒943 上越市東城町 3 - 5 - 51

山本 明 宛

盛況の「原生林の夕べ」

— 保護運動の大きな力へ —

保護部 山本 明

去る5月6日、新潟市県民会館で催された「原生林の夕べ」は、1,000人を超す入場者で大ホールを埋め尽す盛況であった。一昨年長岡でのブナ原生林シンポジウムに続いて、更に保護への盛り上りを示すものとなった。

第1部ではまず日本最大のブナ原生林である白神山地を写した映画「ブナ林の四季」が上映され、続いてギタリストの佐藤正美氏のネイチャーコンサートとして、自然を曲想に取り入れた幾曲かを独奏。第2部では「釣り吉三平」で有名な漫画家の矢口高雄氏の講演があり、郷里の秋田県でガキ大将だった子供の頃を振り返って、原生林を含む山と川がいかに大きな存在であったか体験を通して語られた。最後はトークショウで、NHK解説委員の伊藤和明氏の司会で、長岡市出身の女優でニュースキャスターの星野知子さん、新大農学部教授でブナ林研究を永年続けている丸山孝平氏、日本自然保護協会参事で日本のブナ林保護に力を注いでいる工藤父母道氏、それに矢口氏も加わって原生林とその保護を中心に語り合われた。もっと広い視野から原生林を見て保護すべきだという共通の認識であった。特に工藤氏は「いま緑の量と共に、その質も問われている」と指摘された。

県民会館の別室ではこの日を挟んで3日間特別展示が行われ、新潟敬和学園高校で15年の教職経歴のある自然風景写真家の森本二郎氏の写真や、新潟市在住の版画家大久保正史氏の四季の山野草木を描いたほのぼのとした版画と共に、当支部からも四ツ切りカラー20点の野鳥写真が展示されて注目を引いた。

翌日は協賛行事として、菅名岳を守る会と当支部の共催で、菅名岳の自然観察会が催された。生憎の雨風にもかかわらず80人程の参



トークショウの場面

加者があり、当支部会員も10人以上参加した。また新発田の五十公野公園でも自然観察会が催され、その後も加盟団体の中でいくつかの協賛行事が行われた。

この「原生林の夕べ」は日本自然保護協会と地元保護団体により、昨年4月から日本列島を縦断して各地で開催されてきた。本県でも当支部をはじめ県内の自然関係23団体が加盟する「雪国新潟の自然を考える会」が主管し、他に新潟県野鳥愛護会など9団体が協賛し、また新潟市・五泉市・上川村など3市村と新潟日報社や大新聞の新潟支局、NHK・民放各テレビ局などの後援も受け、更に11の企業・団体から資金援助の協力もあった。

当初は加盟や協賛の要請を受けた団体の中から、にわかづくりの雪国新潟の自然を考える会に、これだけのイベントを開催する力があるのかと疑問視する向きもあったが、フタをあけてみると既に記したように見事なものであった。それには1年も前から企画され、加盟各団体から実行委員を出して昨年9月から5回にわたって実行委員会を開いて準備が進められ、また開催までには多くの方々がボランティアで献身的に取り組んだ陰の力もあった。当支部も実行委員会、写真展示、菅名岳観察会など形の上では積極性を示したが、実質的な面では若干不十分さがあった。

ともあれ、県内の自然関係団体が力を合せて1つの意義あるイベントを成功させたことは、正に画期的なことで、今後の保護運動に大きな力となるであろう。

ハヤブサ (*Falco peregrinus*) ファルコ ペレグリヌス

風間 辰夫

・日本での分布

冬鳥として渡来するものが殆んどであるが、最近本州、北海道を中心に繁殖する個体が多くなってきた。

・繁殖地及び生息数

主としてソビエト領域で繁殖し、冬期も大部分はソビエト領域やアフリカ北部等に渡り日本へ渡来するのは多くない。生息数ははっきりしないが千の単位といわれている。

新潟県下での繁殖数は現在日本で一番多い。具体的な場所を示すわけにはいかないが、繁殖地の中心は海岸線である。

・食性

主としてハト類が多く、次いでシギ、チドリ、カモ類で、ツグミ、ムクドリなども食べている。本種は生きて元気のいい個体を襲って捕食するので、常に健康体でなければならない。

・生態

本種をよく観察していると、他のワシタカ類とちがって少しのすきもない状態で昔の大名の風格がある。大名がタカ狩りに使用したことがうかがえる（他にオオタカを使用、クマタカは明治以降に多く使用された）。

また警戒心が非常に強く、営巣地では20メートルも接近すると、キャッキョと警戒音を発して飛びまわる。

海岸、河口を中心に主として飛んでいる。ハト類、シギ類、カモ類、チドリ類を襲って捕えるが、県内で唯一のレースバトのコースとなっている場所に繁殖している個体は、10～20分ごとに上空を通過するレースバトを襲っているが90パーセントは捕獲できないようだった。

傷病鳥として収容された2個体は、いずれも本県の北部からであり、重体で手当も効を奏せず死んでしまった。

残念なのはこのうちの1個体は1～2年飼育されたものであり、営業地から“ヒナ”を捕獲したものと判断された。

また他の1個体は雄の成鳥で右足が欠損していたが、保護されたのが7月であり、その地方に繁殖地のあることは容易に想像できた。

・人工増殖の成功

本種ではないが、ヨーロッパやアメリカを中心に生息するハヤブサは一種絶滅の危機にさらされたが、アメリカのコーネル大学での人工増殖が成功し、すでに3,000羽ほど自然界へ帰しており、アメリカ政府とコーネル大学の努力には感謝しなければならない。

日本はこの“ツメのアカ”でものみたいと思うのは私ばかりではないと思う。

なぜ人工増殖にふみ切ったかということ、PCBの使用により、食物連鎖でPCBがハヤブサの体内へ入り卵殻ができない卵が多数生まれ、ヒナの発生がおぼつかない状況になった。このままでは“絶滅”すぐ臨機応変の措置が人工増殖——成功となった。

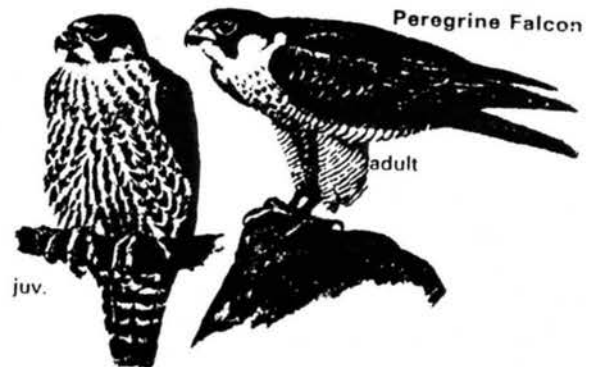
現在は

日米渡り鳥条約対象鳥 (S 49. 9. 19)

日ソ “ (S 63. 12. 20)

特殊鳥類指定 (S 59. 1. 1)

で貴重な種となっている。



「鳥の鳴声の放送」で いなくなった？ムクドリ

長谷川 誠

長岡市の中部より北へ約5 km, ムクドリが集まるNTTの鉄塔がある。ここで、鳥害問題が発生した。今年、「鳥の鳴声の放送」を流すことにより、ムクドリがいなくなった。これまでの経過を報告したい。

◎昨年までの経過

この鉄塔が建てられたのは1977年である。例年の飛来状況は2月下旬に来はじめ、3月には数千羽がネグラとして集まる。4月以降、ネグラの数は少しずつ減るが、鉄塔にパイプ状の鋼材が多数使用されており、絶好の営巣場所となり、集団営巣地となる。鉄塔周辺には住宅や車の販売店が多くあり、直接のフン害の他、数日好天が続くと乾燥したフンが鉄塔から舞い上がる。これらの状況から、毎年地域住民から、苦情がNTTに多数寄せられた。また、鉄塔のサビの発生など通信設備にも被害がでてきた。

この為、NTTとしては、鳥追い用キラキラテープ、鉄塔をハンマーでたたき、目玉バルーン、テグス張り（旭川の鉄塔でカラスに対して有効という事例有）等対策を実施してきた。しかし、どれもこれも、効果は一時的なもので、利口なムクドリには、有効な対策とはなりえなかった。最後の手段として、1986年からは、鉄塔全体を網ですっぽりおおう方法をとっている。この方法は、効果はあげたが、冬期に雪や氷が網にへばりつき、マイクロ回線が断になるおそれがある為、春に設置降雪前に撤去を繰り返さねばならず、相当の出費が必要となった。

◎標識調査と今年の経過

鉄塔をすっぽり網でおおう前の1986年3月、この鉄塔で渡辺史さんの協力を得て標識調査を行なった。今までの経験からムクドリは捕

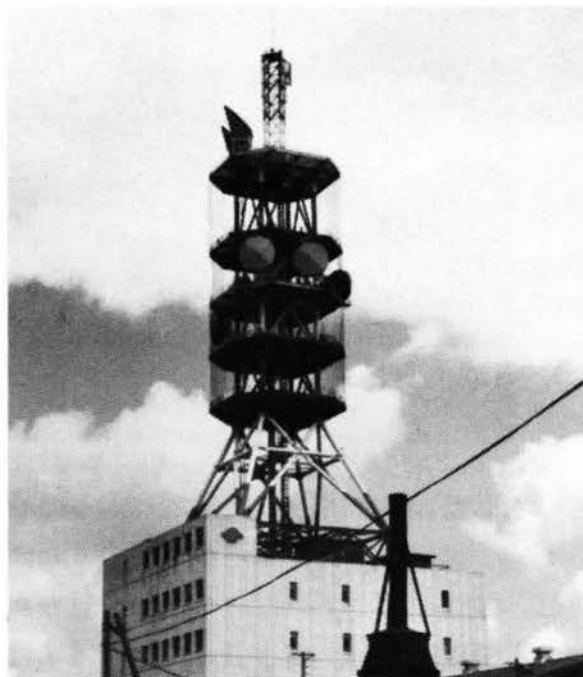


図1 網ですっぽりおわれた鉄塔

獲しにくい鳥という認識があったが、1日で50羽あまりを標識放鳥することができた。渡辺さんの話によると、3月の時期の標識は初めてで、標識放鳥した全ての個体が成鳥と判断され、興味深い結果となった。さらに、同年5月に十日町で、翌年6月には栃尾市で回収された。

これらの成果を受け、今年も、網でおおう前に標識調査を実施したいとNTTに申し出た。NTTとしても、この調査に社員を派遣するなかから、鳥の生態について勉強し防鳥対策に役立てたいとの話があり、安全第一（なにしろ地上約50メートルの作業である）に、協力して作業にあたることとなった。

今年は異常暖冬のせい、ムクドリの飛来数も少なかったが、3月中旬～下旬にかけて5日間で50羽の標識放鳥をすることができた。そんな折「補獲されたムクドリのうち数羽に1羽、激しく鳴く事がある。この鳴声を録音して、スピーカーで流そう」というアイデアが出された。幸いすぐ鳴声は録音できさっそく実行に移す事になった。4月3日鉄塔に集まるムクドリの数は前日と同じく500羽あまりであった。鉄塔の各段に各々ラジオカセットをセットし、ムクドリが少し来はじめた頃



図2 鉄塔に集まるムクドリ群れ

から鳴らした。ムクドリは、鉄塔に入るのを試みたが、施回してほとんどが飛び去った。一部は、鉄塔に入ってしばらく様子を見たが、これらも最終的には、飛び去った。翌日には数羽の群れがきたが、すぐ飛び去って行った。繁殖期の巣作り間近で、ネグラは自然に少なくなる時期ではあるが、それにしてもテープの効果は、すごいものがあつた。その翌日からはピターッと来なくなったのである。

◎今後のこと

鳥害対策を考えるうえで「自然現象の一時的なもの」として放置できなくなり、アクションをおこす(鳥をその場所から退去させる)場合、被害状況や忍耐の限界等総合的に判断し実施しなければならないと考える。今回私は、身をもって経験したが、この防鳥のやり方が、大変むずかしい。どんな方法もすぐ慣れを生ずるし、少しの“おどし”も効果は、長続きしない。100%の効果を期待するのなら、今回のNTTのようにすっぱりおおうしかない。しかし、この方法も経費の問題がある。

今回偶然にも、「鳥の鳴声の放送」によってある程度の効果があることがわかった。しかし、これも、まだ1回のことであり、まだまだ不明の点も多い。放送のしかた(音量、音質)ムクドリの季節的な反応の違い等々。今後、機会をとらえて、いろいろなケースでやってみたいと思っている。なお、この種のことを、外国では、かなり利用されていると、

由井正敏著「鳥獣害の防ぎ方」に書いてある。

さいごに、この間、渡辺史さん(とくにこの春は悠久山のサギ問題で多忙であった)をはじめ、長岡野鳥の会の皆さんや数多くの人から助言等をいただき非常に感謝している。この場をお借りしてお礼申し上げたい。

チドリ科ケリの生息分布

石部 久

チドリ科の中で比較的大型で頭に冠羽等をもっているグループをケリ類といい世界に24種生息している。この中で日本ではタゲリとケリの2種を産する。ケリは全長37cm、チドリ型体形をもち冠羽はない。生息分布や生態に関してナゾが多く、繁殖地は局地的で、東北、愛知、三重から近畿をへて福井へ続く一帯の2つの離れた地域に限り分布が知られている。

今回4、5、6、9月に、新潟市長潟、新潟市三枚潟の2ヶ所においてケリを観察した。9月には3羽の群を三枚潟で確認している。1988年にも鳥屋野潟南岸水田中で交尾するケリを観察している。

ケリの発声は常時に「キィキィ」「ケーケー」だが、カラスやヒトなどの接近時に空へ舞いあがり「キキッ、キキッ」「ケリリッ……」と金属的な鋭い発声をする。ケリの和名はこれから語源を発している。比較的少ない鳥であり分布は興味深い。今後の調査を要する。

東頸城郡松代町の鳥

松永 洸

1. はじめに

松代町は、隣接する松之山町と並んで昔から野鳥の多い所として知られ、これまで松代町の野鳥として、37科102種(1989, 松代町史鳥類編)が報告されている。筆者は、1986年4月から3年間松代町で勤務し、その間77種を確認し、また1987年からは、松代町の野鳥を見る会(会長佐藤公男公民館長, 会員25名)とともに、松代城跡公園周辺において毎月1回の割合で、調査を兼ね探鳥会を行ない、これまで51種を確認した。この調査等で松代町における鳥類相について判明しつつある。松代町の鳥類相についてはいずれ報告する機会もあると思うので、今回はこれまで観察した鳥の中から数種について紹介したい。

2. 松代町の鳥

(1) ノジコ

本種は、松代町の鳥として推選されているようであるが、今だ確定していないようだ。

松代町では、普通に生息し、4月中旬ころから姿を見ることができ、主に傾斜地のブナ林の林縁から前面が開けた草地等の場所に多い。松代城跡公園周辺での調査では、出現場所は、毎年きまった場所で出現しており、1986年から1988年までの19回の調査で7回合計12羽となっており、36.8%の出現率となっている。

松代町では本種を“アオストト”と呼んでいるようである。

(2) オシドリ

松代町では、ガンカモ科の鳥はカルガモと本種が多く若干のマガモ、コガモが生息する。

本種の松代町での観察期間は、例年3月ころから11月ころまでで、積雪期にお

いては、姿を見ることはまれであることから移動するものと思われる。3月ころになると、5~10数羽の群で飛ぶ姿を見ることができる。筆者が勤務した3年間合計で20数羽のヒナを保護した経験もあり、10m位の高さから巣立ちする姿を観察したこともある。

(3) ブッポウソウ

松代町に割合多い種で、3番以上の営巣を確認している。松代町での本種の営巣樹は、ブナが多いようであるが、最近では営巣できる大木が少なくなっているの、減少するのではないかと思われる。町全体としては10数番が繁殖しているものと思われる。

(4) ヤマセミ

本種は、松代町で普通に観察され、特に、国道253号線沿いの渋海川で観察することができる。町内では3~4番が生息していると認められる。

松代町では本種をチョウセンガラスと呼んでいるようである。

(5) アカショウビン

松代町では、サンコウチョウと並んで激減している種類で、3年間のうち3回鳴き声を聞いただけである。1987年夏には総合体育館のガラスに衝突して拾得されたものが、町公民館に保管されている。今年、町の話では、例年になく本誌の鳴き声を聞くことが多いとのことであり、その年によって渡来数に変化があるのではないかと思われる。

3. まとめ

以上5種について簡単に書いてきたが、松代町には、オオミズナギドリが迷行したり、ホシガラスの記録があったりで、詳細に調査すれば、おもしろい結果が出るのではないかと思う。今後引きつづき調査し報告したいと思う。

新潟県探鳥地散策シリーズ

信濃川河口畔

南 加乃子

風に乗って高校生の話す声がきこえる日もあれば、白新線のレールの響きも伝わってくる、見上げると新潟のシンボル県庁の姿がそびえている。ここは信濃川の終着点に近い河口畔である。新潟市の賑いを肌で感じることでできる場所であるが、河川の生物群集を調査している関係もあり、よくでかけている。今回は千歳大橋から昭和大橋までの約2kmを探鳥地として紹介する。

信濃川は長野県南佐久郡川上村より源を発し、新潟県新潟市で日本海に流入する日本最長の川である。槍ヶ岳源流から371km、新潟県内延長153kmを旅する河として存在している。

近年、河川整備が各所でおこり、信濃川河口も急激に景観を変えつつある。

季節を追って鳥類の生息状況を調べていくと、これら環境の急変にもかかわらず、様々な鳥がいくつかの存在様式を示してくれていることがわかる。

◆季節変化と鳥相3型

信濃川河口を利用して生息をみせる鳥に3つのタイプの存在様式をみることが出来る。

- 1年を通して出現し、みられる種
(通年型) - 主な種類 - カルガモ, アオサギ, ダイサギ
- 春から夏にかけて出現し繁殖活動をする種
(繁殖型) - 主な種類 - オオヨシキリ, バン, ヨシゴイ
- 秋から春にかけて出現しみられる型
(越冬型) - 主な種類 - ユリカモメ, コガモ, コハクチョウ

◆鳥のいる場所

信濃川河口は両岸に新潟県庁はじめ放送局、学校、ガスタンクなど大きな建物が並び、土手には背たけの低いヤナギがある程度で広い視界が得られる。

鳥がいれば、すぐわかるほど見通しがきく。主に大型サギ類やガンカモ類の存在は、すぐに観察できるが、河岸に生育するアシ原に生息する小型の鳥類を見つけることは難しい。しかしこのアシ原をたんねんに探していくことは時として、おもしろい鳥に出会うことができる。

カワセミは清流にすむ鳥として知られているが、アシ原では、たびたび出会う鳥である。

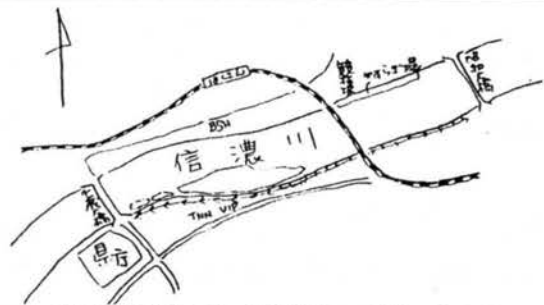
ヨシゴイは6月になるとみられ10月初旬に姿を消していく。

大きな声を出すオオヨシキリも、広く静かに流れる川面と比してかわいらしくきこえる。

その他、チョウゲンボウやオオジュリンもアシ原にみられる。

しかし河口の広さや様々な建造物の重なりにくらべ鳥たちのオアシスとも思えるアシ原は小さく人の手の加え加減、サジ加減で、いかようにも変わってしまう不安定な存在である。

美しい自然としての構造のあり方を散策しながら、みんなで考えていかなければならない課題をもつ場所である。



交通の便：新潟駅から新潟交通バス路線、県庁前行で終点「県庁前」下車徒歩1分、千歳大橋たもとから河口へ向う土手のコース。土手下には駐車している車もありますが混んでいます。

探鳥が終わったら、新潟放送ラジオスタジオ（公開している時間帯がほとんど）の見学や県庁最上階からの展望、また万代橋たもとまで歩き、ホテルオークラのグリルフェニックスでコーヒーのみ、ウミネコを見ながら観察のまとめをするのもいいが。

発行 平成元年11月1日 No.28

発行人 大島 基

事務局 日本野鳥の会新潟県支部

〒950-21 新潟県新潟市五十嵐西15番地38号

電話0025-261-1416 石部 久 振替 新潟 1-6002